

英語科教育法 I (第4講)

言語習得



目次（言語習得）

- ▶ 子どもの言語発達の段階
- ▶ ジャン・ピアジェ
- ▶ 文法の習得
- ▶ 行動主義理論
- ▶ オーディオリンガルメソッド
- ▶ 生得説理論



幼児の言語の発達段階

時期	
～9か月	ア－アなど、まだ言語とは呼べそうにないbabbling（喃語＝なんご）の時期
9か月～1歳頃	マンマ、ブーブーなどの一語文を使い始める
1歳～2歳頃	二語文、三語文、さらに多語文へと発達する。周りの状況について述べたり、自分の意志を表せるようになる。会話もできるようになる。抽象的な機能を表す言葉、日本語の助詞、英語の屈折語尾などは、まだ使えない。
2歳～5,6歳頃	文法がほぼ完成する。語彙も2,000～3,000語に達する。文字に対する興味が生じる→小学校の英語教育の問題とも関連する



ジャン・ピアジェ (Jean Piaget)

- ▶ 知の個体発生としての認知発達と、知の系統発生としての科学史を重ね合わせて考察する発生的認識論 (genetic epistemology) を提唱。
- ▶ ①感覚運動期(0～2歳) 模倣行動
- ▶ ②前操作期(2～7歳) アニミズム
- ▶ ③具体的操作期(7～12歳) 論理的思考が発達し、他者の立場に立つの行動
- ▶ ④形式的操作期(12歳以降) 抽象的思考



発生的認識論

- ▶ 乳児は自我意識を待たず、主体と客体を区別することが出来ない。乳児にとって主体と客体が未分化であるのだが身体によって無意識的に中心化されている。
- ▶ 乳児の活動は自分自身の身体を直接客体に結び付けており、それぞれの活動（吸う、凝視する、把握する。など）がべつべつに存在しておりそれらに関連づけることが出来ない。
- ▶ 共通の唯一の基準は自らの身体である。



言語の習得はどのようになされるか。

- ▶ naturalistic learning (自然の状態での習得) implicit knowledge
- ▶ formal learning (人為的な状態での習得) / explicit knowledge
- ▶ 一歳までに母語に必要な音素の聞き分けができるようになる。
- ▶ 一歳頃に、初語を産出する。一語文で会話する。
- ▶ 一歳半頃に、二語文から複語文を産出する。



一語文→二語文

- ▶ 1歳頃には単語を発音できるようになり、1歳半頃には二語文を使用し始める。それ以降、急速に言語能力は発達し、4歳頃にはアナロジーやメタファーを理解できるようになる。
- ▶ 二語文→ブーブー、来た
- ▶ わんわん、おおきー
- ▶ Cat yellow
- ▶ Water drink



言語習得の臨界期

- ▶ 第1言語を習得する場合は、いわゆる臨界期を逃すと習得は不可能となる。
- ▶ 第2言語の習得は、何歳からでも可能である。例えば、70歳からはじめてもある程度は可能である。ただ、若い時期が有利であり、これは、敏感期という用語を当てはめる人もいる。



行動主義理論（1）

- ▶ 喃語期のある時期の赤ん坊は、たまたま、すぐ近くの人や物の名称に相当する、あるいはそれに近づいた音を発する。そのときに、周囲の人は驚きと喜びの音が出される。周囲の好意的な反応である。これは、赤ん坊にとって、心理的な報酬 reward となる。依然と類似した音が発せられて、この音が強化 reinforce される。そして、次第に成人の音に近づく。



行動主義理論（2）

- ▶ 幼児の音声は次第に成人の音声に近づくような形で周囲の人々の強化を受ける。次第に幼児の音声は成人の音声に近づいたときだけ強化を受ける。その結果、その音声は習慣として定着して、特定の音声連続と事物の連合(association)が成立する。



人間は機械である。

- ▶ 生まれた子どもの心は真っ白である。
- ▶ 行動主義は、唯物論・機械論の一形態であると考えられ、あたかもブラックボックスのような外からは観察ができない心（mind）の独在を認めていない。
- ▶ 人間は機械のように刺激に自動的に対応する。
- ▶ 言語の習得は習慣である。
- ▶ 経験主義(empiricism)刺激・反応・強化



Audiolingual Method

- ▶ フリーズメソッド、ミシガンメソッドとも呼ばれる。
- ▶ 行動主義理論に基づいている。
- ▶ 言語習得は習慣の形成であり、基本文型の徹底的な反復練習を行って、言語習慣を作りあげる。
- ▶ Palmer の方法と共通点がある。音声の反復練習をすることに重点を置く。



言語生得説理論 (1)

- ▶ Chomsky 等が唱えた説である。
- ▶ 人間は短期間で母語の体系をマスターしてしまうので、言語の規則を生まれたときから、すでに体得している。
- ▶ 子どもは生まれながらにして、言語習得装置(Language Acquisition Device: LAD)を持っている。Chomsky
- ▶ 一次的言語資料(primary linguistic data)に接することで、言語の文法を作り上げていく。



言語生得説理論（2）

- ▶ 創造性が言語の本質的な性質である。
- ▶ 日常の言語活動で、挨拶や決まり文句などの限られた表現を除けば、我々が聞いたり話したりする発話の大部分は、自分がそれまでに接したことがない言語表現である。
- ▶ 言語の創造性とは、自分にとって新しい発話に接してそれを理解し、状況に適した発話を無限に生成できること。→生成文法



課題

- ▶ ピアジェの考えを説明せよ。
- ▶ 言語生得説とは何か説明をせよ。
- ▶ 言語習得の臨界期とは何か説明をせよ。

